言葉言葉言葉

岸田國士

青空文庫

——僕はあなた見たいな女が好きですよ。

——さう？　あたしも、あなた見たいな男が好き……。

——へえ、それぢや、入れ代つたらよかつたなあ。

かういふ間違ひは、そんなに稀ではない。

頭のてつぺんから——うしろから——額の生え際から声を出す人がある。日本の役者は妙な処から声を出しますね。——旧劇では頬のあたりから。新派劇では眼と眼の間から。そして、所謂新劇では、はてな、あれはと、耳の上からでしたね。たしか……。

公園のベンチに腰をかけてゐると、一匹の野良犬が、どこからかやつて来て、ベンチの脚に小便をひつかける。

犬は、してしまふと、僕の方をちらと横目で見て、あわてゝ眼をそらす。さうして、気まりが悪るさうに、向うへ行つてしまふ。

「おい、君、君……」
僕はうつかり、さう呼びかけるところだつた。

批評家が、自ら他人に加へた批評を読み返して見て、常にそれが、恰も他人が自分に加へた批評であるかのやうな感銘を受ける時、その批評家は、みぢめである。
彼は、しまひに、本当のことが言へなくなるだらう。
僕もさういふ一人であるらしい。

「翻訳者の歓びは、発見者の歓びである」
僕がかういふのに対して、友の××は言ふ。「翻訳にも創造がある」と。そして附け加へる。
「マラルメやヴアレリイを訳してゐれば、自分も詩を作らうなどといふ欲望は起らない」と。
僕がこの友を畏れ、且つ愛する所以である。

親戚の青年が一人、僕のところにやつて来る——月に一度乃至二度。

彼は、来た時にはたゞ頭を下げる。それから帰る時、「もう帰ります」と云ふまで、黙り続けてゐる——二時間でも三時間でも、時とすると半日。

僕は仕事の手を休めて彼の顔を見てゐる。といふよりも彼が今、何を考へてゐるかを知らうと努める。……彼は何も考へてはゐない。たゞ、悩ましげに、「自己の存在」を見つめてゐるのだ。

彼は僕と話をしに来るのではない。彼には、黙つて彼の前にすわつてゐる人間が必要なのかも知れない。

誰にでもさういふ時がある。

庭にコスモスを植ゑさせた。少し時期が遅いかも知れないといふことであつた。早(ひでり)が続いた。朝晩、丹念に水をやつた。萎れかけてゐた葉が、茎が、活き〳〵と伸び上つた。立派についた。

「なあに、コスモスなら、ほうつといてもつきますよ」

今になつて、人が、かう云つたとする。

あなたは、水をやつたことを後悔しますか。ほんたうに後悔しますか。

十六になる妹は波を怖わがらない。二十になる姉は怖わがる。
五つぐらゐの男の児は、波が寄せて来る毎に泣いた。三十を余計は越してゐないと思はれる、その母親らしい女は、子供をあやしながら、波に背を打たせてゐる。
髪白の老婆が、黒い日傘の下から、「あぶないよ、お前」と叫んだ。

あまり虫が多いので、窓に葭簀の戸をはめさせた。
さうすると、一匹の蠅が、十匹の蛾よりもうるさくなつた。

女どもにも、たまには良い空気を吸はせてやらう——かう思つて……。
海岸の宿屋に来てから、彼女らは盛に食ふ。——ほんとに、いゝのか知らと思ふほど食ふ。
「やつぱり、からだの具合が違つて来るんだね、薬なんだね……そんなに腹がへるのは」かういふと——
「それや……自分でお勝手をしないだけでもね」

「非常に佳い」甲の友は云ふ。
「どうも下らない」乙の友は云ふ。
その中間を取つて、「まあ相当なものだらう」と思ふのが人情なら、その人情は、また「鬼に呉れ」てしまへ。

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集19」岩波書店
　　1989（平成元）年12月8日発行
底本の親本：「言葉言葉言葉」改造社
　　1926（大正15）年6月20日発行
初出：「文芸春秋　第二年第八号」
　　1924（大正13）年9月1日発行
入力：tatsuki
校正：Juki
2005年11月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

言葉言葉言葉

岸田國士

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/